

## 終章 世界の米貿易動向と米の国際市場の構造（日本の米輸出入をめぐる国際環境に焦点を当て）一

小澤 健二

### はじめに

「世界の米貿易動向と米の国際市場の特質」というテーマで、ジャポニカ米の国際市場の規模およびその国際取引に一つの焦点を当てて報告いたします。大きなテーマですので、事実確認と論点整理が中心となります。そのうえで、本研究会の趣旨に配慮して、日本の米輸出入をめぐる国際環境の変化について後段で論及します。

### 1 世界の米貿易動向

最初に、主要食用穀物の小麦と対比した米の貿易動向をみます。小麦と比較すると、米の貿易の伸び率がとくに90年代以降顕著に上昇していることが大きな特徴です。80年代までは世界の米生産量に占める貿易量の割合は3%前後でしたが、現在では6～7%に上昇しています。

1表 主要穀物別の貿易動向（単位：1000トン）

	1880/81	1990/91	2000/01	2007/08
小麦	100,440	111,114	126,230	143,176
米	13,306	12,602	23,155	29,566
トウモロコシ	80,319	69,672	82,037	105,418
その他	32,129	28,674	35,352	37,660
穀物全体	226,194	222,062	266,774	315,820
大豆	26,656	26,400	52,925	76,425

（なお、米の貿易量は精米であるが、初米の貿易量も精米の貿易量の1割ほど存在する）

1表の出所はFAO STATによる。以下の表の出所も同じである。

そのなかで、世界の米貿易動向をめぐる特徴的な動きを指摘しますと、まず世界の米輸入数量でみた地域別輸入シェアでは、90年代以降には80年代までと比べて大きな変化が生じています。80年代初頭までは、世界の米輸入の半分以上をアジアが占めていました。しかし、80年代には「緑の革命」によるいくつかの東南アジアの国々での米自給の達成によって、アジアの米輸入比率は急速に低下しました。菊池さんの報告にあるように、代わって輸入比率が上昇しているのはアフリカです。ただし、2000年代に入ってアジアの輸入比

率が再び上昇する動きがみられ、この点には留意が必要です。

もう1つの米輸入の地域別の特徴としては、90年代初頭以降にはアメリカ大陸の米輸入の増加も目立ちます。アメリカ大陸の中では、北米（メキシコも含めて）、およびカリブ海諸国を含む中米での米輸入が大幅に増加しています。2000年代のアジアの米輸入の増加は、中東、フィリピン、インドネシアを中心とし、これに日本、韓国によるMA輸入もアジアの米輸入を底支えする要因です。この結果、2000年代後半以降には、世界の米輸入総量の50%弱をアジアが占めます。

第2表 世界の地域別米輸入シェア—数量—（単位：％）

	1980/81	1990/91	2000/2001	2007/2008
アフリカ	19.5	26.9	25.5	26.1
アメリカ	7.8	16.7	13.8	14.1
ヨーロッパ	20.2	18.9	12.9	12.3
アジア	51.3	35.5	45.9	45.9
オセアニア	1.1	2.1	1.6	1.6

他方、主要な米輸出諸国としては、1980年代には周知のようにタイとアメリカの米輸出競争が激化し、世界の米輸出は両国を中心に展開しました。もっともアメリカの米輸出は、60年代までPL-480などによる援助輸出の比重が高く、商業ベースの輸出増が目立つのは1970年代半ば以降です。60年代前半までは、ミャンマーも（ビルマは第二次大戦以前からの主要な米輸出国）有力な輸出国でしたが、次第に輸出国の地位から脱落します。1990年代に入って、ドイモイ政策の成果としてベトナムの輸出量が増大し、その数年後の1990年代半ば以降インドの米輸出が急増しました。現在では、インドとベトナムがタイに次ぐ第2位の米輸出国の地位を競っています。ただ、年によって両国の米輸出は大幅に変動することに注意が必要です。アメリカの輸出量は1990年代以降、停滞し、2000年代には年によってはパキスタンの米輸出量がアメリカを上回ります。アジア以外では、エジプト、イタリア、ウルグアイなどの国々が米輸出国として一定の比率を占めます。このように、90年代以降、米の主要輸出諸国の構成も変化し続けています。

米輸入の地域別動向をもう少し詳細にみますと、アフリカの米輸入量が大幅に増加するなかで、さらに細分化すると輸入増加率がとくに高いのは中央アフリカ（コンゴ2カ国）および南アフリカです。ただ、アフリカの米輸入数量の大部分は西アフリカが占め、西ア

第3表 世界の主要米輸出諸国の構成 (単位：%)

	1980/81	1990/91	2000/2001	2008/2009
タイ	23.3	32.6	27.5	33.6
ベトナム		10.4	14.4	14.6
インド	5.5	4.7	7.4	8.2
アメリカ	23.7	18.4	10.6	11.2
パキスタン	8.9	7.6	8.8	9.9
中国	7.9	5.3	10.1	3.1
EU	7.5	9.1	5.4	5.7
オーストラリア	2.8	3.7	2.5	
その他	20.4	8.2	13.3	13.7

フリカの米輸入増が全体としてはアフリカの米輸入量の大幅増加につながっています。

またアメリカ大陸では、カナダ、メキシコ、アメリカ合衆国の北アメリカの米輸入量の増加が大幅です。それと並んで、ホンジュラス、ドミニカ、ニカラグア、ハイチのような中央アメリカおよびカリブ海の前最貧諸国の米輸入増も目立ちます。一方、ブラジルの米輸入量が年によって60～70万トンの水準にも達し、南アメリカの米輸入量は年ごとに大きく変動します。

アジアでは、西アジア（中東諸国）の米輸入量が増加していること、および1980年代に一旦は輸入が減少した東南アジアのフィリピン、インドネシアの米輸入量が90年代以降、再び増加傾向にあることが特徴です。

第4表 世界の地域別米輸入シェア—価額— (単位：%)

	1980/81	1990/91	2000/2001	2007/2008
アフリカ	19	20.7	20.6	20.2
アメリカ	8.5	16.4	13.9	13.9
ヨーロッパ	21.9	28.2	17.5	17
アジア	49.4	32.7	46.1	46.9
オセアニア	1.2	2	1.9	2

第5表 世界の米輸入に占める数量と価額との乖離—地域、国別— (単位：%)

		1980/81	1990/91	2000/2001	2007/2008
西アフリカ	数量	13	16.4	16.4	20.3
	価額	12.8	11.5	12.1	16.2
東アフリカ	数量	18	5	9.2	7.5
	価額	16.3	4.5	10.1	7.2
アメリカ合衆国	数量		1.3	1.6	2.2
	価額		1.8	3	2.8

もつとも、主要な米輸入の地域あるいは国々ごとに、輸入量と輸入額に相当の乖離が存在します。容易に想像しうるように、アフリカの輸入数量比率は高いものの、輸入額比率は数量比率を相当に下回ります。それに対して、東アジアの国々やアメリカ合衆国の輸入額比率は、輸入数量比率を上回ります。両者の乖離が最も顕著な例は、1993年から94年の日本による緊急米輸入です。日本が国際市場でいかに高価な米を急遽買い集めたかが分かります（第6表）。

第6表 米輸入数量と輸入額との乖離—地域別—

日本	1993/94	2000/2001	2007/2008
数量	10.8	2.8	2.1
価額	28.9	3.3	2.3

その上で、世界の米貿易の地域別構造—これはFAO統計では「マトリックス」と表現されます—にも簡単に言及します。菊池さんの資料に依拠しますと、タイ、インド、アメリカの主要米輸出の三か国の1980年代後半と2000年代前半の相手地域別の輸出には、それぞれの特徴が見出されます。タイの輸出相手地域は世界全域に及びますが、なかでもアフリカのサブ・サハラ諸国の比重が増大し、併せて東南アジア・中東向け比重も相対的に高まっています。インドの輸出相手地域も、タイと同様にサブ・サハラ諸国向けの比重が大きく、同時に中東、北アフリカ、南アジアも重要な輸出市場を構成します。このことは、低価格米を買い付ける国々をタイ、インドが主要な輸出相手国とし、これに地理的条件による輸送コストが影響していることが分かります。同様に、パキスタンの輸出相手地域、国も、インドに類似します。

これに対し、アメリカの輸出相手市場として、アメリカ大陸の比重増が目立ちます。この結果、アメリカの米輸出は80年代まではアフリカ向け輸出が相対的に高かったのに対し、2000年代後半にはその重要性は低下し、アジア向けの輸出比率も低下し続けています。これ以外に、エジプトも有力な米輸出国ですが、その輸出先は中央・北アフリカ、ヨーロッパが大部分を占めます。以上の事実から、世界の地域別の米貿易構造は、取引される米の価格に加え、輸出国と輸入国との間の地理的条件による輸送コスト、および後に論及する米の銘柄あるいは品質面での差異などが主要諸条件をなすと考えられます。FAO統計では、ベトナムの米輸出の相手国が集計されないため、ベトナムの輸出相手国の構成を明示

できません。しかし、谷萩報告に示されるように、ベトナムの輸出相手国もタイと競合する低価格米を輸入する東南アジア、アフリカの国々が中心です。これに加え、政府間貿易に依存するフィリピン、キューバなどへの輸出が相対的に高いことも1つの特徴です。

米輸出に関する留意すべきもう一点は、食糧援助計画による輸出がどの程度の割合を占めるかです。1980年代までは、世界の米貿易量全体の10%強は援助によるもので、特にアメリカの米輸出はPL-480などによる政府計画による輸出の割合が高いことが特徴でした。しかし、2000年代には援助輸出の割合は徐々に低下し、2000年代末現在、その世界の米貿易に占める比率は4～5%前後に低下しています（第7表）。90年代初頭まで、援助輸出の比重が高かったことが、アメリカのアフリカ向け米輸出比率が一定水準を維持した事実と対応します。ちなみに、日本による米援助も年によっては大規模であり、1998年のインドネシアへの援助数量は90万トンに達します。

第7表 世界の米輸出に占める援助の割合

	1980/1981	1990/1991	2000/2001	2005/2006
世界	9%	6.60%	5.30%	2.30%
アメリカ合衆国	10.70%	18.30%	12.30%	4.10%

## 2 米の国際価格と貿易動向

米の国際価格動向は、年ごとの価格変動幅がトウモロコシ、小麦よりも大きいことが1つの特徴です。2002～2003年（二カ年平均、以下、同じ）と2006～2007年を合計した米の平均国際価格はトン当たり262ドルであるのに対し、同期間の小麦の平均国際価格は167ドルです。米の国際価格は小麦を上回りますが、米の国際価格は精米価格なのに対して小麦は精粉、製パンを経て食用になることを考えると、食用穀物としての米の国際価格は小麦を実質的には相当に下回ります。この両者間の価格差が、米と小麦の貿易構造を考える際の主要条件の1つとなります。食用穀物として米が小麦より安価なことが、1990年代半ば以降、米貿易の増加率が小麦を上回る主要因と考えられます。アフリカのサブ・サハラ諸国での米輸入の大幅増も、小麦と対比した米の国際価格の低位性によると考えられます。

もっとも米の輸出価格は輸出国に応じて相違し、FAO統計によると、タイ、パキスタン、アメリカの三者間では、アメリカの輸出価格が最も高く、次いでパキスタン、タイの順です。ベトナムの輸出価格はFAO統計に集計されませんが、谷萩氏の報告にもあるように

ベトナムはタイよりも若干低い価格で輸出します。問題は、タイの輸出価格とされるBOTが、現実の取引価格をどの程度、正確に反映しているかです。BOTが取引価格を反映するとしても、現地の輸入国での輸入価格を把握できないことも問題です。また、米と小麦の両者間の価格差を評価する際に、米の品質、銘柄、用途別の価格差をいかに把握するか、これも米貿易を考える際の重要な問題です。

一例として、カナダ小麦局が集計した品質別の小麦輸出価格を紹介しますと、今年（2011年）に入って小麦価格は上昇を続け、最高価格のデュラム小麦の輸出価格は、4月のトン当たり400ドルから7月初頭には700ドルに上昇しました。これに対し、最低品質の飼料用小麦の7月の輸出価格は400ドルで、最高（デュラム小麦）と最低（飼料用）の輸出価格には1.7～1.8倍ほどの格差が存在します。ヨーロッパが輸出する小麦は飼料用も多く、また2000年代に輸出が急増するCIS諸国の小麦輸出は飼料用の比重がとくに高いとされます。しかし、カナダ小麦局の数字に示されるように、食用と飼料用の小麦の輸出価格差は2倍以内と推定されます。

これに対して、米の銘柄、品質別の国際価格差は小麦をはるかに上回ります。タイ、ベトナムの碎米比率に応じた輸出価格はBOTで把握できますが、碎米比率に応じて価格差が存在します。アフリカ諸国が輸入するのは碎米比率が高い長粒種ですが、この現地取引価格には、1990年代以降、減少傾向にあるものの援助米の取引価格も当然、影響を与えます。藤田報告の統計によると、インドのバスマティ米の輸出価格は非バスマティ米を少なくとも2.5倍以上上回ります。後にも紹介しますが、ヨーロッパの食料小売店における最高級バスマティ米と低品質の長粒種の小売価格には10倍前後の価格差が存在します。このような銘柄、品種、碎米比率に応じた大きな価格差は米の国際市場の構造、特質を反映するものです。

### 3 米の国際市場の構造

1990年代以降、米輸入を大幅に増大させているのは、低価格米の輸入地域、諸国です。その例外は、日本のMA輸入、バスマティ米の輸入諸国、およびアメリカの米輸入です。アメリカの米輸入は高価格の香り米の割合が相対的に高く、このことがアメリカを高価格米の輸入国としています。このように高価格米の輸入諸国は一部に存在しますが、90年代以降の米輸入の大幅増は圧倒的に貧困な低所得諸国に支えられます。このように米の大きな国際価格差のなかで、米の国際市場は「薄い市場」と一般に呼ばれてきました。しかし、

世界の米生産量に占める貿易量比率が6～7%の水準に上昇すると、たんに「薄い市場」と理解してよいかどうかとの問題も生じます。これは、伊東報告が問題としている点です。

また、小麦の国際市場にもある程度該当しますが、米の国際市場は「限界市場」とも呼ばれます。大部分の米生産国は国内の主食用に生産し、国内消費に残余が生じた余剰分が輸出に回されることが、米の国際市場を「限界市場」に位置づける主要条件です。主要な米輸出諸国のなかで、主として輸出目的に米を生産するのはアメリカ、オーストラリアの二カ国に限られます<sup>(1)</sup>。1980年代までと対比して、1990～2000年代以降、これらの「薄い市場」、「限界市場」の米の国際市場の特性にいかなる変化が生じているか、これが米の国際市場の構造を考える際の重要な課題です。

この点は、「薄い市場」、「限界市場」の特質は維持されつつ、その市場特性が1990年代以降、微妙に変化している、との漠然とした表現しかできません。そのなかで、この問題を考える2～3の事実、条件を指摘しておきます。1つは、「薄い市場」が厚みを増すにしたがい、米の国際価格変動の振幅、頻度に変化が生じているか否かです。主要穀物のなかで米の国際価格の変動幅が最大であるのは、「薄い市場」に起因するからです。2つには米が最貧国の主要食料となり、世界的な米の国際市場がたんなる「薄い市場」とは言えなくなるにつれ、世界的な米輸入需要に充分に対応しうる輸出量を既存の主要輸出諸国が確保しうるか否かが問われる状況となっています。

3つには、「限界市場」の特性に影響を与える諸条件が変化していることです。それは、80年代までと対比して90年代以降にはインド及び中国の食糧・農業政策の「限界市場」への影響の度合が格段に増大していることです。このことは、90年代半ば以降のインドの米輸出の大幅増、2000年代前半の世界の米在庫に占める中国の比重が圧倒的に高い事実裏づけられます。また、インドネシア、フィリピンの米輸入増、および谷萩報告のタイの輸出動向に示されるように、東南アジアの米輸出入諸国の米関連政策も米の国際市場への影響度合いを強めています。

#### 4 米貿易の取引チャンネル

米の国際市場の構造は、米の国際的な流通経路と相関し、それは米貿易の「取引チャンネル」の問題でもあります。穀物貿易には補助金付き輸出、援助、輸出促進の信用供与、など様々な形態で国家、政府が関与します。これは小麦貿易の場合により明確ですが、米貿易にも国家、政府が大きく関与します。その典型例は日本のMA輸入ですが、それ以外に

もベトナムとフィリッピン、キューバ間の米貿易なども政府間貿易の代表例です。アメリカのアメリカ大陸向け米輸出の比重の高まりにも、様々な政策措置が影響していると推定されます。とくに世界の米輸入に占めるアフリカの輸入比重の増大は、米貿易に果たす取引チャンネルの役割を一層高めています。

アフリカ諸国への米輸出は、特定の取引チャンネルに依存する度合がとくに大きいとされます。旧宗主国の貿易業者が現地の米流通、取引との仲介的な役割を果たすためです。例えば、米輸入量が多い西アフリカ諸国の多くはフランスの植民地であったことにより、フランス系貿易業者が現地のトレーダーと結びついて輸入業務を行なう、とされます。それは、アフリカ諸国への米輸出が複雑な現物取引や三角取引の比重が高いことにも帰結します。2000年代初頭に破産した穀物メジャーのアンドレー（ノーブルに商権が継承）は、アフリカへの米輸出に際して三角貿易などの独自の貿易業務のノウハウを有したとされ、このようなノウハウを持たない日本商社はアフリカへの米輸出に参入できないとされます。このように米貿易に固有の取引チャンネルと米の国際市場の構造は表裏の関係にあります。

## 5 ジャポニカ米の貿易規模

低価格米の比重が大きい米の国際市場のなかで、ジャポニカ米の国際市場の規模はどの程度の規模を占めるかが問題です。世界の米生産全体に占めるジャポニカ米の割合を示す公的統計はありませんが、この種の統計収集に鋭意努めている九州大学の伊東教授によると、その比率は1990年代前半で20～25%ほどと推定しています。90年代半ば以降、世界の米生産に占めるジャポニカ米の割合には大きな変化はみられず、伊東教授の推定と大差ないとみられます。それは、中国の米生産に占めるジャポニカ米の生産比率は若干の増加傾向にあるものの、それ以外の主要生産諸国におけるインディカ、ジャポニカ系の生産比率に変化が生じていないためです。ちなみに、中国の米生産に占めるジャポニカ米の比率は、東京農大の菅沼教授が整理された統計によると30%弱です。

その中で、ジャポニカ米の国際貿易量はどの程度の規模になるかが問題です。中国で生産されるジャポニカ米は、韓国、日本のMA輸入分を除くと地場取引を中心とする国内取引が基本です。このため、中国から国際市場に供給されるジャポニカ米の数量はさほど大きいとは考えられません。中国以外のジャポニカ米の輸出諸国は、アメリカ、オーストラリア、およびEUのいくつかの米生産諸国（イタリア、スペイン、ギリシア、フランス）です<sup>(2)</sup>。このうち、EUのジャポニカ米の輸出量は最大限に見積もると30～40万トンですが、そ

の大部分は域内貿易です。それゆえ、ジャポニカ米の国際貿易量は中国、EUを除いた貿易数量をいかにみるかがポイントとなります。

ただし、国際貿易の対象となるジャポニカ米も、一般のジャポニカ米と「高級ジャポニカ米」に二大区分されます。後者は取引業者による通称で、「プレミアム米」とも呼ばれ、品種としては短粒種が該当します。もっとも、高級ジャポニカ米あるいはプレミアム米と一般ジャポニカ米との厳密な区分は難しいのが実情です。この点に留意して、国際流通する一般ジャポニカ米をあえて定義すると、品種としては中粒種のカリフォルニア産のカルロースに代表されます。ただし、高品質のカルロースも「高級ジャポニカ米」にも組み入れられものもあり、両者の截然とした区分を難しくします。

以上を前提に、ジャポニカ米の貿易量の推定を試みます。この推定は、アメリカでジャポニカ米を最も大量に販売している、キッコーマンの子会社のジャパン・フーズ・コーポレーション（JFC）<sup>(3)</sup>からの聞き取り調査にもとづきます。JFCの販売量は年ごとに変化し、最近数年間では2007年がピークで、ほぼ9万トンの販売実績を有します。JFCは、アメリカ、ヨーロッパ、東南アジアの主要諸国で、主として邦人および日本食レストラン向けにジャポニカ米を販売、輸出します。アメリカ国内の販売を中心としますが、それ以外の邦人が居住する、ヨーロッパ諸国などにもアメリカから輸出しています。JFCと同様にジャポニカ米を輸出版売する業者は西本貿易など多数を数えます。そのなかで、JFCのアメリカ国内の販売と輸出を合わせたジャポニカ米の販売シェアは18～20%とされます。この販売シェアとJFCのジャポニカ米販売量の8～9万トンを合算すると、アメリカ、ヨーロッパ、東南アジアの地域、国々でのジャポニカ米の市場規模は40～50万トン前後と見込まれます。

もう一つ、ジャポニカ米の輸出、販売規模を推定するために、国内の大手卸売業者の木徳神糧の事例を紹介します。木徳神糧は20年ほど前からベトナムで短粒種の契約生産を行い、現地精米によって近隣の東南アジア諸国の主要都市を中心にジャポニカ米を輸出、販売しています。2011年現在、木徳神糧のベトナムでの契約農家数は最盛時のほぼ半数の700～800戸、生産量は4,000～5,000トンと見込まれます。ベトナムでの契約生産による木徳神糧のジャポニカ米の輸出版売量は同業者間では大手に属しますが、大手業者によるジャポニカ米の国際取引量もその程度の規模にとどまります。

ジャポニカ米の国際貿易量<sup>(4)</sup>は、上記の40～50万トンに日本、韓国のMA輸入によるジャポニカ米の輸入量、それにEUのジャポニカ米の貿易量を合計したものです。日本のジャポ

ニカ米のMA輸入量は年ごとに若干変動するものの45万トン前後、年々増加傾向にある韓国のMA輸入量30万トンのうちジャポニカ米は25万トンほど、EU域内のジャポニカ米の貿易量は先に言及したように推計が難しいのですが、30～40万トンとしておきます。これらを全て合せると140万～160万トンで、世界の米貿易量全体の6%前後にとどまります。これが、ジャポニカ米の国際貿易量の最大値とみなされます。

もともと、日本のMA輸入のうちの一般輸入は他用途向けであり、主食用の国内市場での流通はSBS輸入米に限定されます。また、倉持報告によると韓国のMA輸入米のうち飯米用は30%（70%は加工用）とされます。このことを考慮し、さらにEU域内でのジャポニカ米の流通量を除外すると、国際取引される主食用のジャポニカ米の流通量はたかだか60万～70万トンと推定できます。

## 6 国際流通するジャポニカ米の小売価格

JFCが扱うジャポニカ米は、カリフォルニア州の有力農協に生産、精米、袋詰めを契約委託し、それを独自のチャンネルで販売、輸出します。主要ブランドは、上位の品質から「玉錦」、「錦」「牡丹」などであり、10キログラム当たり店頭小売価格は1～2ドルの範囲に設定されます。最高と最低とのブランドにはほぼ2倍の価格差があります。これは、日本の国内市場での主要銘柄、品質別の小売価格差とほぼ類似します。最大の販売量を誇るJFCの主要ブランドの「錦」の原料米はカルロースであるのに対し、最高級ブランドの「玉錦」の原料米は短粒種です。

この銘柄、品質別の小売価格差は、1990年代以降、最近までの20年間にさほど変化していません。90年代初頭の伊東教授の調査、および2000年にヨーロッパのベルギーの日本食料品店で私が調べた結果でも、ジャポニカ米の店頭小売価格の最高と最低の価格差はほぼ2倍前後です。ちなみに、最も販売量が大きいとみられる中級ジャポニカ米（JFCの主要ブランドの「錦」に代表される）の小売価格は最も安価な長粒種銘柄の4.5～6倍の水準です。一方、最高品質のバスマティ米の小売価格は、ヨーロッパ、アメリカのいずれでも高級ジャポニカ米をやや上回ります。小売価格を上位からランク付けすると、高級バスマティ米、高級ジャポニカ米、一般ジャポニカ米、一般長粒種米の順となり、さらに一般長粒種米のなかでも品質格差（碎米比率を含む）によって価格差があります。この結果、系統、品種、銘柄に応じて米の末端小売には10倍ほどの価格差が存在すると考えられます。

そのなかで、高級ジャポニカ米と一般ジャポニカ米との品質格差は、品種、銘柄、栽培

方法などに基本的にもとづきます。高級ジャポニカ米は、「こしひかり」、「あきたこまち」の品種名がそのままブランドになるもの、および「ゴールド田牧」、「玉錦」、「国宝ローズ」（国府田農場産）など生産、販売業者による独自のブランドから構成されます。いずれも短粒種です。これらのブランドは注意深く栽培管理され、それによって「高級ジャポニカ米」の品質が保障されます。

しかし、品種としては短粒種でも「高級ジャポニカ米」にランクされないものもあります。ベトナムで契約生産する木徳神糧のジャポニカ米は短粒種ですが、圃場の一定割合に短粒種を契約栽培するために、他の圃場の長粒種米が混ざりやすく、厳密な品質管理が困難であり、この結果、「高級ジャポニカ米」とはされません。短粒種の厳密な栽培管理による「高級ジャポニカ米」の原料米の生産コストは、カルロスよりも単収水準が低いこともあって割高になります。

この結果、木徳神糧の短粒種によるジャポニカ米は、「田牧米」や国府田農場の「国宝ローズ」には品質では対抗できず、中級ジャポニカ米の「錦」レベルのブランドと市場で競合します。ちなみに、木徳神糧のジャポニカ米は、東南アジアのシンガポール、クアラルンプールなどの販売が中心ですが、その小売価格およびブランド名は現地の大型量販店に一任し、末端の大型量販店が他のジャポニカ米と比較しつつ、価格を設定しているようです。このように、国際市場で高級ジャポニカ米のブランドが確立しているのは、品種名で販売するブランド以外では、「田牧米」や国府田農場の「国宝ローズ」、JFCの「玉錦」などの少数に限られます。そして、これら高級ブランドに品質では若干劣るものの、それを価格メリットで補う様々のブランドが海外市場で市場競争を展開しており、これがジャポニカ米の国際流通、販売の現状とみられます。それは、多数かつ多様な取引業者が海外の現地生産者とそれぞれジャポニカ米を契約生産し、それが特定のブランドとしてジャポニカ米市場に出回る動きでもあります。

## 7 米の国際市場での「高級ジャポニカ米」などの位置づけ

1990年代以降、貧困者の人口比率が高いアフリカ、中米、中東などで輸入需要の急増を背景に、世界の米貿易は拡大しており、それは「貧者」の食料としての米の消費増大とも評価できます。このなかで、「高級ジャポニカ米」の市場はいかに位置づけられるでしょうか。これは、バスティマ米の国際市場の評価とも関連します。米貿易に従事する商社関係者の話によると、米の国際市場は購入者の大部分が貧困者を対象とする市場とごく少数の

富裕層が購入する市場（バスティマ米、高級ジャポニカ米などの）から構成され、前者が米の国際市場の圧倒的な割合を占めるとされます。消費者の所得階層に焦点を当てると、両者は相互に切り離された市場となります。

このように考えると、輸入需要が拡大している一般長粒種は「貧者」の食料であり、日々の糧としては、小麦、メイズとの代替も可能です。購入されるものの多くは、小麦よりも安価なことによって選好されるのに対し、バスティマ米、高級ジャポニカ米は「奢侈財」として、その微妙な味覚差、品質差ゆえに選好されます。高級ジャポニカ米と一般ジャポニカ米の截然とした区分が困難なことは先に言及しましたが、「一般ジャポニカ米」の国際市場も「奢侈財」的な要素を含みつつも、そこでは価格要因も強く作用します。この結果として、「ジャポニカ米」のブランドごとの価格形成がなされます。

また、長粒種とジャポニカ米の国際市場も代替可能な同一市場とは言えません。それは、風土、文化的条件を背景に、長粒種とジャポニカ米への嗜好がそれぞれ定着しているからです。ジャポニカ米、長粒種は、歴史のなかで培われたそれぞれの食文化にもとづいて消費されます。それは、長粒種とジャポニカ米の食べ方の差異にも反映されます。粘りのあるジャポニカ米は箸を使う人たちが主として食べるのに対し、手、フォーク、れんげなどで中華系料理などを食べる人たちは、パサパサした長粒種のインディカ米を選好する事実裏付けられます。

これは、特有の臭みを持つパーボイルド米にも該当します。その臭みと保存性によってパーボイルド米の貿易量も一定水準を維持します。また、長粒種の場合には、谷萩報告にもあるように、新米よりも古米のほうが高品質と評価されるため、新米を好む日本を中心とする東アジアの一部消費者は、パーボイルド米はもちろん、主食用に長粒種を選好するとは考えられません。このような米の国際市場の特性に注目すると、ジャポニカ米の貿易量が世界的に拡大する余地は限られます。

このようなジャポニカ米と長粒種との消費代替の困難に代表されるように、米の系統、品種、銘柄に応じて米の国際市場は重層的な市場を構成する一方で、低価格米と高価格米、および一般長粒種とジャポニカ米のそれぞれの価格変動はほぼ一致し、価格変動幅も類似します。そこに米の国際市場の複雑な特質、構造が見出されます。そして、消費の点では代替性が小さいインディカ系とジャポニカ系の米の国際価格がある程度一致して変動することには、米貿易に特有な取引チャンネルが影響していると考えられます。

## 8 日本の米輸出の可能性

日本の稲作経営が直面する困難な状況への活路として、日本の米輸出を大々的に提唱する農業経済学者およびジャーナリストがいます。しかし、日本の米輸出の可能性を提唱する論者は、必ずしも米の国際市場の構造、特質に配慮しているようにみえません。さきに指摘したように、国際取引されるジャポニカ米の流通量は、EU域内の取引および日本のMA輸入の一般輸入を除外すると（同様に韓国のMA輸入の加工用も除外すると）最大限に見積もっても60万トン前後にとどまります。

そのなかで、日本の米輸出と競合する「高級ジャポニカ米」、あるいはプレミアム米の国際取引量は、ジャポニカ米の国際流通量の1割未満、数量は多く見積もっても6万トンに達しないと推定されます。日本の米輸出の可能性を考える際には、この「高級ジャポニカ米」の国際流通量に留意する必要があります。

日本の米輸出量は、2005年の634トンから2009年に1,312トン、さらに2010年度には1,898トンへと着実に増加しています。しかし、2011年度には東日本大震災の影響による国内の需給動向によって2010年度を下回る見込みです。この日本の米輸出は、全農よりも商系卸業者によるものが多数を占め、全農による輸出量は2010年産で300トンと米輸出全体の15%前後にとどまっています。

国内の米集荷で高いシェアを有する全農が米輸出で商系卸業者に遅れをとるのには、国内での主食用、加工用を含めた集荷をめぐる新たな動き、趨勢が影響していると考えられます。例えば、大手卸業者は、国内の有力農協に積極的に働きかけ、主食用と抱き合わせて加工用および新規需要米の集荷活動を積極的に行っています。国内の米消費減退による水田の生産調整比率の上昇のなかで、少しでも作付面積の拡大、確保に努めようとする稲作経営者や農協は、こうした大手卸業者による積極的な集荷活動に呼応する販売、出荷の動きをみせています。

2010年度までの大量の在庫保有を教訓として、集荷した米を迅速に販売する動きが有力農協を中心に強まっています。戸別所得補償政策に代表される最近の米政策も米輸出に影響を与えています。戸別所得補償政策は生産調整対象の水田での、加工用米や新規需要米の生産拡大を促進します。とくに10アール当たり2万円の補助金が給付される加工用米は販路の確保さえあれば、生産者はその生産に積極的に対応します。一部の大手卸売業者は主食用集荷と、加工用および輸出用の新規需要米の集荷を抱き合わせする営業活動を展開しているとみられ、そのことが大手卸売業者による米輸出量が全農を大きく上回る主要因と

考えられます。

このように日本の米輸出は、最近、増加傾向にあることは確かですが、それが拡大し続けるとは考えられません。価格条件が大きな障壁となるためです。農林中金総研の藤野氏の論文によると、日本の米輸出は香港、台湾、シンガポール、中国などを中心としますが、日本からの輸出の伸びが最も期待される中国での輸出米の小売価格は、藤野氏によるとキロ当たり1400～1500円です<sup>(6)</sup>。これは、日本品種の現地生産の小売価格の10倍に相当し、現地の在来種と対比すると15～30倍の水準に達します。この高価格は関税、輸送費もですが、現地での流通マージンが高いことも大きな要因です。すでにみたように、「高級ジャポニカ米」は奢侈財の特質を有し、それゆえに国際流通量は一定量にとどまります。日本の輸出米の現地小売価格は、現在、国際流通する「高級ジャポニカ米」の価格水準をさらにはるかに上回っています。このような日本の輸出米の価格水準は、当然、その輸出量を制約せざるをえません。

日本の輸出米の主たる需要は、海外現地で流通するジャポニカ米の価格水準を考慮すると、一般的な食用よりも贈答用の奢侈品としての一部富裕層向けとみられます。このような特殊な奢侈財は、流通量が少量に限定されるゆえに一定の需要を喚起します。奢侈財が交換価値を有する主要根拠は、その希少性に求められます。輸出量、流通量が増加すれば、希少性は薄れ、奢侈財としての交換価値も低下せざるをえません。要するに、日本の輸出米は海外現地での取引流通量が少量にとどまるゆえに一部富裕層の需要対象となり、商品価値を有すると考えられます。それゆえ、日本の米輸出数量には自ずと上限が画されます。大手米卸業者の輸出担当者も、日本の米輸出量の上限を1万トンと見込んでいます。日本の米輸出の可能性を大々的に主張する論者は、米の国際市場の特性に配慮しないままに、たんなる願望を政策提言に代えているとしか考えられません。

## 9 日本の米輸入をめぐる国際環境の変化—ガット農業合意以後の動き—

日本のMAによる最近5年間のジャポニカ米の年間平均輸入量は40万トン弱であり、EUの域内取引を除くと、ジャポニカ米の国際流通量全体の30%弱を占めます。日本のMA輸入がジャポニカ米の国際取引にいかにか大きな比重を占めるかが分かります。このうち36万トンはアメリカ（カリフォルニア産米）からの恒常的輸入です。カリフォルニア州の米生産量が大幅に増加した2011年には事情をやや異にしますが、アメリカからのMA輸入量はカリフォルニア州の米生産量の30%前後にも達します。カリフォルニア産の中粒種の国内価格は、

年ごとの変動はあるもののアメリカ南部の長粒種を40%前後上回ります。カリフォルニア米の国内価格の相対的な高水準は、主として日本のMA輸入に支えられています。カリフォルニア州の米作農場あるいは精米業界にすると、日本のMA輸入は最も安定した市場確保、および高位の価格水準の維持を意味します。

このように日本のMA輸入は、アメリカ、とくにカリフォルニア州の稲作経営の利害を保障、体现するものと言えます。その度合いは日本ほどではないにせよ、カリフォルニア産米を8万トン輸入する、韓国のMA輸入にも同様に該当します。

日本のMA輸入がアメリカの利害に應えるものであるとの事実は、ガット・ウルグアイ・ラウンドの農業合意の経緯に対応します。ガット・ウルグアイ交渉が行われた1980年代前半から90年代前半は、タイとアメリカ間の米輸出競争の激化にみられるように、米の国際価格が1970年代以降では最も低下した時期です。この過程で、輸出依存度の高いアメリカの米農場および精米業者は、輸出向け市場確保を積極的に追求し、この動きを背景に日本の米市場開放はアメリカの重要な通商戦略に押し上げられました。日本のMA輸入がアメリカの米産業界の利害に沿って運用されるのも、1980年代以降の日米貿易摩擦を背景とする日米の二国間および国際通商交渉におけるアメリカの通商政策の成功、逆に言えば日本の敗北の所産です。

しかし、日本のMA輸入の開始以降の10数年間に、世界の米需給基調の変化を背景に、世界の米貿易構造も大きく変化しています。日本の米市場開放に成功したアメリカでも、日本へのMA輸出の中心のカリフォルニア州の米生産は水資源の制約によって拡大の余地は限られ、2000年代に入って、カリフォルニア州の米生産はほとんど増加していません。服部報告にあるように、南部のテキサス州では米生産は大幅に減少しています。一方、アメリカ南部の米輸出の相手地域としては、メキシコや中南米の比重が高まり、アメリカ国内の米消費も拡大を続けています。

また日本のMA輸入の開始時には、オーストラリアからの米輸出の拡大が予想されました。事実、MA輸入が開始された数年間にはオーストラリア米はMA輸入の一定比率を占めました。しかし、岩崎報告にもみるように2000年代初頭以降、オーストラリアを頻繁に襲った干魃によってその米輸出余力は著しく減退し、現在ではオーストラリアからのMA輸出はほぼ皆無の状況です。最近のアメリカ、オーストラリアの米輸出動向に示されるように、2000年代後半以降、両国の日本への米輸入圧力は90年代半ばまでと対比して著しく弱まっています。

これには、アフリカ、中南米の最貧諸国を中心に世界的に米輸入需要が大幅に増大し、世界の米需給基調に変化がみられることが影響します。加えて、中東諸国、インドネシア、フィリピンの米輸入需要の増大、およびブラジルなどの米需給動向も近年の世界の米需給動向に影響を与えています。2008年の米の国際価格の急騰に際して、ベトナム、インドで一時的に米輸出禁止措置を導入したのは、それぞれが国内での米の安定供給を最優先するもので、米の国際需給動向の不安定性の強まりを背景としています。

以上の、近年の米の国際需給基調および世界の米貿易動向は、WTO農業交渉における日本のセンセティブ品目としての米の取扱いにも影響を与えるとみられます。東アジアを中心に多国間の米の国際備蓄政策が話題となるのも上記の事実を反映します。だが、他方ではTPPへの参加問題が懸案となる状況があり、中国を含む自由貿易交渉も近い将来に浮上する可能性もあります。これらは、ガット農業合意時とは相違する新たな日本の米輸入に対する対外圧力の強まりを意味します。

かりに日本がTPPに加入すれば、米生産の拡大余力を有するアメリカ南部のアーカンソー州などでは、日本向けの中・短粒種の生産、輸出に向けた動きが強まることが予想されます。また、中国を含めた自由貿易協定の締結は、中国の日本向け米輸出圧力を増大させ、その影響力はアメリカを凌ぐことが予想されます。それは、中国からのSBS輸入が一定比率を維持していること、韓国のMA輸入も中国からの輸入が最大である事実にも裏付けられます。中国の東北三省では、1980年代以降ジャポニカ米の品質改善をともなった生産拡大が続いており、「高級ジャポニカ米」を含めた中国のジャポニカ米の生産・輸出の拡大の可能性は大きいと予想されます。

ただし、中国によるジャポニカ米の生産および輸出の拡大は今後の中国の食料・農業政策、および中国の米流通システムに依存する度合いが大きいとみられます。国内での品質検査体制を含めて、産地から中国国内の北京、上海など大消費地までの流通、取引システムが、省政府単位を中心とする在庫備蓄政策といかに整合的に構築されるか、それにSBS輸入に関与する日本の米穀流通業者がいかに対応するかが重要な条件となります。

さらに長期的な視点に立つと、第二次大戦以前から1960年代まで米の主要輸出国に位置したミャンマーの新たな政治・経済動向も、日本のMA輸入に影響を与える可能性も否定できません。

ガット農業合意以降、日本の主食向けMA輸入はSBS輸入に限定されてきましたが、主要諸国からのSBS輸入は、現地生産者、流通業者に日本の商社、米穀関係者が働きかけ、そこを

介在するものであり、多分に開発輸入の性格を有します。しかし、日本の流通業者が介在するMA輸入と関連する開発輸入は、さほどの成果を達成できませんでした。SBS輸入量が制限されていることでもあります。国際市場と日本国内での価格差が絶えず変動していることが、その主要条件です。

このようにMA輸入開始後の10数年間に日本のMA輸入をめぐる国際環境は大きく変化しています。このような日本の米輸入をめぐる国際環境の変化は、日本の今後のMA輸入にいかなる意味を有するか、これに関してはさらに課題を限定した接近が必要とされます。その一つが、上記の日本の業者によるMA輸入と関連する開発輸入の動きがさほどの成果をあげられなかった条件、要因を、世界の米貿易動向、米の国際市場の特質と関連づけて検証することです。それは、各々の主要諸国の食料・農業政策の動向と同時に主要諸国の米流通システムを検討することでもあります。米の国際市場の特質を「限界市場」に求めると、その「限界市場」の構造は当該主要諸国の米関連施策と同時にそれぞれに独自の当該諸国の流通システムの解明を通して始めて明らかになります。日本の米政策をめぐる国際環境については、1990年代半のガット農業交渉時と対比すると、アメリカ、オーストラリアなどからの対外圧力が著しく軽減していることを確認したうえで、中国などの米関連政策や米の流通システムのあり方が潜在的影響力を強めていること、このことを提起して結びとします。

- (1)もちろん、アメリカ、オーストラリア以外にも、タイ、ベトナム、イタリアなども米生産に占める輸出の割合は大きい。しかし、米生産の歴史的起源に遡ると、上記三カ国の米生産は国内消費向けを中心とし、余剰分が貿易に回されると言ってもよい。
- (2)EUの米貿易に占めるジャポニカ系はどの程度の割合か正確に知ることは、統計データがないため困難である。ここでは、EUの米生産の3分1がジャポニカ系とする伊東教授の推定に依拠し、その米貿易についてのジャポニカ系の割合もこの生産比率に準拠させている。
- (3)JFCの米貿易を担当するのは太平洋貿易会社であるが、両社は事実上、同一会社である。
- (4)JFCのアメリカでのジャポニカ米販売は厳密には輸出とは言えず、この点に留意する必要がある。
- (5)以下の日本からの米輸出の現地での小売り販売価格などについては、藤野氏の論考（藤野信之「米輸出の動向と展望」『農林中金研究』、第63巻 第12号、2010年）。